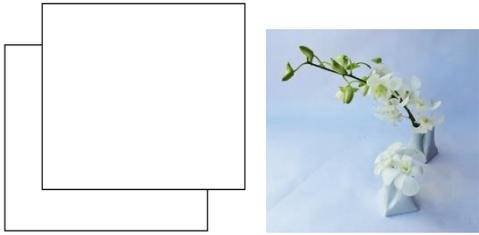
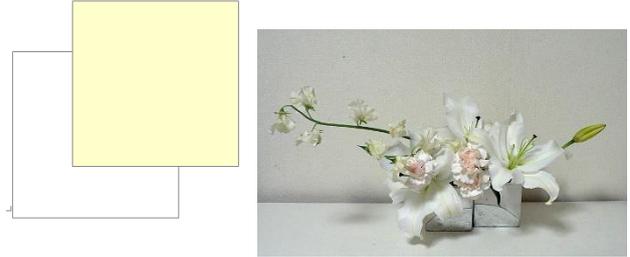


余話 (2) 【色目】<氷>と<氷重> の事

No.41 【色目】氷 <表：白 裏：白>



No.18 【色目】氷重 <表：烏ノ子色 裏：白>



上記赤字の各 No.で、すでにアップした色目である。

【色目 氷】 白だけで、氷の冷たい感じを表現。色2色の組み合わせだが、双方に変化を与えるべく、一方には砧で打って光沢を出したり、あるいは、糊引きや、貝で磨くことで光沢を出したりしたそう。しかし、こんな寒々しいものを冬に？ 目にするだけで寒さ倍増しそうじゃないか！ と、現代人はつい思ってしまう。

【色目 氷重】 こちらは、表に淡い灰味の黄色「烏ノ子色」を使い、ちょっとした変化を出している。何かに雪が積もり、下の色によって雪がやや曇って見えるなんてこと、なのかな？ などと、これまた現代人の感性で考えてしまう。

が、「染司よしおか」の六代目、吉岡更紗さんは、平安貴族のその辺の繊細な美意識を次のように解説している（某雑誌の記事より）。

※「染司よしおか」は、絹、麻、木綿など天然の素材を、紫草の根、紅花の花びら、茜の根、刈安の葉と茎、団栗の実など、自然の植物によって染織している伝統工芸の工房。

[染司よしおか（そめのつかさよしおか）工房・京都店 \(textiles-yoshioka.com\)](http://textiles-yoshioka.com)

彼女は『源氏物語』の宇治十帖「浮舟」を例に取り、薫と匂宮（注：ある種、身勝手な色男二人）に翻弄される浮舟が、匂宮によって一時的に連れ出された時、上着を脱いだ浮舟の様子について描写した一節——なつかしきほどなる白き限りを五つばかり、袖口裾のほどまでなまめかしく、色々にあまた重ねたらむよりも、をかしょう着なしたり——を現代語訳しながら、こう語る。

「着慣れて柔らかくなった白い衣を五枚ほど着ていて、それが色を重ねた袷姿より優美であるという。現代の感覚であると、白のみのかさねだと寒々しい印象もあるが、それを氷や雪の情景になぞらえたところに平安時代の貴人の美意識が感じられる組み合わせである。

蚕が吐いたままの糸を使った生絹（きぎぬ）に加えて、精錬した練絹（ねりぎぬ）、さらに砧で打って艶を出したり、石や貝で磨いたりなど、白のみといってもさまざまな表情を持った絹を重ね、氷や雪を表現したのである。」

また、彼女は、「水色」「氷色」について、こう解説している。

「水も本来は無色透明のものであるが、日本人は、晴れた空の色を映した水面が時に淡く、時に濃く青色を見せることから『水色』という言葉を生み出した。氷にも「氷色」と名付け、太陽の光を受けてきらめく氷の様子や氷の下からの影が生み出すさまなど、その微妙な色相の変化を、さまざまな工夫をして表現してきた」と。